

〈研究ノート〉

夢見られる夢見る人

——覚醒・夢・熟睡をめぐって

山折 哲雄

一

デス・マスクというのがある。死者の顔を石膏で型取りしたものだ。

古くはエジプトでつくられ、ルネッサンス以降は著名な人物を記念してつくられた。ナポレオンやベートーベンのものなら誰でも知っている。だが、わが国ではその風は大正期ごろから輸入され、それ以前はデス・マスクをつくる習慣はなかった。

なぜ、そうだったのだろうか。理由はいろいろ考えられるが、その一つに、墓にたいする考え方が西欧と日本とはまるで違っていたということを挙げることができよう。

日本の墓は死者の靈魂を祀り、それが籠っている場所であるが、西欧の墓は故人の生前の面影をしのぶ記念の場所である。墓は基本

的には記念碑であるのだから、死者の肖像をそこに飾るといふ風習が自然に発生することになった。事実、西欧にはそういう型の墓がじつに多い。デス・マスクの場合もこれと同様であって、死者を追慕し、それを記念するための肖像なのであった。

モスクワの赤の広場にあるレーニン廟では、レーニンのミイラが飾られ、ロンドンのハイゲート墓地には、マルクスの墓があつて巨大な胸像がその上にのせられている。それらの場所には、故人の魂の存在する余地はまったくないのであるが、それはかれらが唯物論者であつたからなのではない。

レーニンの死後のミイラもマルクスの生前のマスクも、われわれの祖先感覚とははるかに趣を異にして、直接的で簡明な、たんなる肉体的な記念碑なのである。私は以前、レーニンのミイラとマルクスの胸像を訪ねて、そのことを実感した。

ところがそれにくらべて私がほんとうに怖ろしいと思うのは、むしろ熟睡しているときの人間の顔の方である。とくに深夜にみる熟睡者の顔は怖い。それは生きている人間の顔であるから、もちろんデス・マスクではない。だがしばしば、デス・マスクよりもはるかに死に近い顔になっている。

もつとも熟睡に入る前の段階では、夢を見たり寝言をいっていたりして、そんなときの顔は他愛なく生き生きとしている。歯ぎしりをしているときの顔の表情も、そうだ。どちらかというと、明るくて、それを見ているものに何となく安心を与える。ところが熟睡に落ちている人間の表情は、呼吸を停めたように静かで、かぎりなく暗い。そのデス・マスクにも似た表情はからだ全体から生気を奪っているようにさえみえる。

やがて眠りが浅くなり、夢の時間が訪れ、表情が明るさをとりもどしていく。デス・マスクが日常の表情へと蘇っていく。それともにからだがすこしずつ暖かさを回復していく。

そのように考えると、われわれは毎日のように死と再生をくり返しているのではないかという思いにかられる。眠るという行為は、自分自身をかぎりなく死体に近づけるための儀式のようにさえ思えてくる。やがて、その熟睡の淵から、浅い眠りをへて目覚めの世界へとどつてくる。それは一度死んだ自分のからだに、ふたたび生の衣裳を着せるための儀式のようにみえるのである。

話はちょっと変わるが、熟睡というと私には忘れることができない思い出がある。スイスの精神医学者、メダルト・ボスの本を読んだときのことだ。かれの『精神医学者のインド紀行』¹という本である。これはわが国でも翻訳が出たので、それを読んだのである。ボス博士はチューリッヒ大学の教授になった人だが、ハイデッガーやフロイト、およびユングの影響をうけ、心身症や神経症の研究と治療に専念して、新境地を開いた。

そのボスがたまたまインド医学会の招待をうけて、インドに滞在することになった。講演をしたり、共同研究に参加したりしたが、せっかくの機会だからというので、いく人かの伝統的な聖者に会いに行くことになった。このところインドの聖者といえば、ラジニシとかサイババなどの聖者が世界的な人気をえて、マスコミなどをにぎわしているが、ボスが会おうとしたのはそういう聖者ではなかった。

かれが訪ねていったのは、ヒマラヤの山中で長いあいだ瞑想修行に打ちこんでいる、ある高名な聖者であった。だがこのとき、博士はその山の中で待ちぼうけを食わされた。いろいろな理由をもうけて、なかなか会ってくれない。二日たち三日たっても、会見の許しがでない。いいかげんしびれを切らしそうになったころ、ようやく

く面会することができたという。

ちょうどわが国の禅の僧堂で、偉い老師をはるばる訪ねてきた雲水が、たちまち門前払いを食らわされるのに似ている。水をかけられ、棒で叩かれ、ののしられる。そのような嫌がらせのような何日間かを堪えしのんで、ようやく目指す相手に会ってもらえるのである。メダルト・ボスの場合もそれと同じで、いわば人と人との出会う場合の儀式のようなものであった。

その聖者との対話を重ねていくうちに、かれは意外なことをきかされて驚く。なぜなら聖者は、インドの瞑想においては、それを深めていく過程で夢のない熟睡の状態があらわれてくるということをいったからである。現実のわれわれの意識も、そしていろいろなイメージがあらわれる夢の世界も、すべてはこの深い熟睡によって支えられているはずだという。

その聖者の言葉をきいているうちに、ボスは西欧近代の人間学にはそのような熟睡という考え方がまったくいないということに気づいて、愕然とするのである。なるほど、そういえばフロイトの精神分析は夢と覚醒という二元的な関係性のなかで成立している治療法ではないか。そしてかれのいう深層意識には、熟睡という観念はつゆほども宿ってはいない……。ボスはそのように反省している²。

しかしよく考えてみると、インドの哲学や宗教の伝統においては、すでに二千年の昔からこの熟睡というテーマを問題にしていた。プ

ラーフマナやらウパニシャッドというような哲学書のなかでそれが論じられていたのである。ボスがヒマラヤ山中で出会った聖者は、そのような伝統を忠実に守って瞑想修行に励んでいたということになるだろう。

人間の心の奥底を探索するのに、たしかに、フロイトのように夢と覚醒という二元的な枠組みで分析しようとする立場が一方にある。西欧近代の方法といってよいだろう。ところがそれについて、インドの宗教的哲学的な伝統においては、その夢と覚醒のさらに基底に熟睡のステージがあることを想定する考え方があった。アジアの伝統的な方法と呼ぶことができるかもしれない。

その二つの方法には、それぞれに利点もあれば欠点もあるだろう。けれども人間の全存在をまるごと了解するためには、覚醒と夢の彼方に熟睡のステージを想定することの方がいっそう重要ではないだろうか。おそらくそういう反省に立つてのことであつたのだろう。

メダルト・ボスは、西欧人の「心理療法 (Psychotherapie)」にたいして、インド人の瞑想を「光明療法 (Erhellungstherapie)」と呼んだのである³。

熟睡する人間の顔に怖ろしい死の影を読みとろうとした私は、その熟睡の彼方に横たわる「光明」の世界にはほとんど気づくことがなかったのである。

ところで、熟睡と夢のあいだは連続しているのであろうか。それとも断絶しているのであろうか。そのところがよくわからない。生き生きとした夢の世界と死んだような熟睡の深みは異質の壁にへだてられているようにもみえる。しかし他面で、熟睡の淵から蘇った意識は、いつでも流れるように夢と覚醒の岸辺へと復帰しているのではないか。

問題解決の鍵はやはり夢のなかにあるのではないか。夢は、覚醒と熟睡のあいだをつなぐメッセンジャー・ボーイのような役割をはたしているようにもみえるからである。

たとえば、ユングである。

ユングは、どうも私なんかには真似のできないような夢見の達人だったらしい。あるときかれは、夢にヨガ行者がでてくるのを見たが、その行者の夢のなかにも自分の姿が映っていたという¹⁾。

これはいうまでもないことだが、ユング自身がヨガ行者の夢を見、そして行者もユングを夢に見ていた、というようなことではない。

ユングとヨガ行者が互いに夢を見るという、二元的な場が設定されているのではないということに注意しよう。そうではなくて、夢見る者が夢見られているという、一種の解きたい意識のねじれ現象のことをいっている。

だからリクツをいえば、自分の夢のなかにてくる行者の夢に別の自分があらわれ、その自分がまた何かの夢を見、その夢にまた別の自分の姿が映り、……といった工合にその夢見の連鎖が無限につづいていく。その環は、ゆくえもしれぬ深層の世界へと退行していく。

なるほど、ユングはなかなか面白い夢を見たものだ。しかもそれをちゃんと記憶していて、意味ありげに他人に語っているところが曲者である。それというのも、その夢のメカニズムのなかに例の集合的無意識のモチーフが隠されているからなのかもしれない。

ユングの語った話は、一般的には「夢見られる夢見る人」(dreamer dreamed)のパラドックスとして知られているものに属するだろう。たとえば、ルネ・マグリットのようなアーチスト、ピラソンのような劇作家、J・ボルヘスやウルスラ・ルグワンのような作家、あるいは科学小説やコミックの類にまでこのテーマが登場する。古くは、アイスキュロスの『オレスティア』、そしてジョイスの『ユリシイズ』やフォースターの『インドへの道』にも姿をあらわす。

そのほか、この手の仕掛をもてあそぶ常習犯として『悪魔の詩』のサルマン・ラシュディなんかは、さしずめ逸することができない。かれはすでに『真夜中の子どもたち』のなかで、ある人間の頭のなかではじまった夢が他の多くの人間の頭のなかに浸透していく話を

とりあげていた。そして『悪魔の詩』では、全体のかんりの部分が、主人公の一人ジブリール・ファリシユタによって経験される夢の場面で占められている。

ジブリールは幼いころから夢見がちで、空想や幻想を愛する少年だった。そのかがれが長じてなお、夢と現実との区別も定かならぬ白昼夢に襲われ、そのなかで例のイスラームの批判をくりひろげている。人呼んでラシュディの「マジック・リアリズム」なる文体が駆使されることになったというわけだ。

そのサルマン・ラシュディがインドのムスリム家庭の生まれであったことは、けっして偶然ではない。「夢見られる夢見る人」の物語といえば、それはもうインドが断然他を引き放してその豊かな脈を保存してきたからである。

それで思いおこされるのが、インドの哲学的な比喩物語『ヨーガヴァーシシュタ』(Yogavasishta)である。⁽⁵⁾この作品には、例によって世にも不思議な夢物語がでてくる。

『ヨーガヴァーシシュタ』というのは、カシュミールの地で、六世紀から十二世紀の長期間にわたってサンスクリット語で書かれた物語大成の一つである。ヴァシシュタという仙人が五十五種の物語を語るといふ体裁をとっている。そのなかに、右にのべた「夢見られる夢見る人」をライトモチーフとする、ねじれにねじれたお話がいくらかでもでてくる。

まず、その一つを紹介してみよう⁽⁶⁾。

昔々、物思いにふける坊さんがいた。あるとき普通の人間になろうと思うと、その思いのなかにある男の姿が浮かび、それが自分だと思った。おまけにジーヴァタという名前までつけた。この男はある日、酒をのんで眠りこけて夢を見る。すると、一日中本を読んでいるバラモンがあらわれ、ジーヴァタはいつものまにかこのバラモンにすりかわってしまう。

ある日、バラモンは日中の仕事で疲れ、深い眠りにおちた。そして夢のなかで王子になっている自分を見る。ところがこの王子も、ある日のことたくさん食事をとって眠りにおちた。例によって夢があらわれ、そのなかで自分が王になって多くの土地を支配し、ありとあらゆるぜいたくな生活をしているありさまを見た。

(『ヨーガヴァーシシュタ』第六巻、第一章)

話はこのように夢見を回転軸にして、いつはてるともなくつづいていく。夢を見る主人公が、その夢のなかにあらわれるものへとつぎつぎにすりかわって物語が進行していくのである。右の話につづけていえば、王は夢のなかで天女になっている自分を見、同様にして天女は鹿に、鹿はつる草に、つる草はミツバチへと夢を媒介にし

て転変をくり返す。

主人公の変容は人間にとどまらず、動物や植物にまで及んでいることに注意しよう。ミツバチは蓮の葉液で酔っぱらい、ぼうつとなつたところに突然あらわれた象に一蹴りされ、こんどはその象に入れかわってしまう。こうして象はふたたびミツバチに、ミツバチは鷺鳥に、鷺鳥は白鳥へと生まれ変わる。

ところがある日のこと、白鳥はルドラ神に出会つた。そして「自分がルドラだ」と思うと、その神になっていた。ルドラ神は特殊な知力を持ち、それまでに心のなかで経験してきた夢Ⅱ再生物語のすべてを見透すことができた。かれは早速、屍体のようになつて眠っている坊さんのところに行き、かれを目覚めさせた。こうして環のようにつながる再生夢のイリュージョンが一つ一つ明らかにされていった。

坊さんは深い眠りにおち、つぎつぎに夢の世界を彷徨したあげくに、夢のなかでもとの自分のところにもどってくる。現実と非現実がよじれてつながり、幻影と経験が夢Ⅱ再生の環でつながれていく。虚実の境界が溶け、人生の始点と終点がパラドキシカルに重なり合っているといつてよいだろう。

そこには、メビウスの帯やエッシャーのだまし絵にも通ずる深層の原風景が語られているのかもしれない。とすればさきのユングもまた、「夢見られる夢見る人」として、右の話にでてくるルドラ神

のような「経験」をした人だったのではないだろうか。

四

もう一つ、『ヨーガヴァーシシュタ』のなかから比喩物語を紹介してみよう。そこでは、ある王が夢のなかで不可触民（チャンドーラ）に身をおとし、覚めたあとそれが真実の出来事であったことを知る、というまことにありそうもない話が語られている。

昔、北方バーンダバ族の肥沃な国で、ラヴァナ（Lavana）という有徳の王が支配していた。ある日かれが王座に坐つていたとき、一人の魔術師が入ってきて王にいった。「その場にお坐りのまま、世にも不思議な魔術をお目にかけましょう」。

そういつて、孔雀の羽のついた杖をふると、ある男が馬を引いて入ってきた。王はその馬をみているうちに、眼がすわって動かなくなり、瞑想に入っていくようであった。廷臣たちは心配したが、数刻ののち王は目を覚まし、王座から堕ちそうになった。召使たちが手をさしのべると、王が驚いてきいた。

「ここは、いったいどこだ」。

王はすっかり意識をとりもどしたあとで、つぎのような話を語った。

「馬の前に坐つて魔術師のふる杖をみているうちに、自分がそ

の馬にのり、たった一人で、狩にでかけていく幻覚(夢)をみた。どこかしらない砂漠を横切って、やがて森についた。だが、ある樹から垂れ下るつる草にひっかかり、馬はそのまま、走って行ってしまった。

その夜はそのまままんじりともせず過したが、翌日になってそのあたりを歩き廻っていると、たまたま食物を入れた壺を運んでいる黒い肌をした少女に出会った。ちょうど腹が空いていたので、分けてくれるよう頼んでみた。するとかの女は、自分は不可触民であるといい、あなたと結婚すれば食べ物とをさしあげることができる、という。私がうなずくと、食べ物とを恵んでくれ、そのまま村に入って二人は結婚した。私はにわか不可触民になったのである。

やがて私たちには二人の息子と二人の娘が授かり、六年が過ぎた。汚い腰巻を巻き、しらみにまみれ、殺したばかりの獣の生暖かい生血をすすったり、死体埋葬場の腐肉を食べて過したのである。私は王の子として生まれたのであったが、年をとるにつれて王であったことを忘れてしまい、本当に一人の不可触民になってしまった。

あるときのことだ。怖るべき飢饉が訪れ、洪水が発生し、森が火事になった。私は家族をつれて別の森に逃れた。そして妻が眠っているときに、下の息子に「私の肉を料理して食べよ」

といった。かれが生き残るにはそうするしかなかったのだ。そこで私は死ぬつもりで火葬の薪を用意し、いざその上に身を投げようとしたとき王座から落ちそうになったのである。やがて「万才」の叫び声と音楽で私はわれにかえった。——これが魔術師の手にかかった私の夢(幻想)である」。

ラヴァナ王の話が終ったとき、その魔術師の姿が急にみえなくなった。廷臣たちが驚いていった。「王よ、これは魔術ではありません。この現実世界の方がたんなる心の迷妄のあらわれなのであって、あなたがごらんになったのはそのことを悟らせるための聖なる幻想(夢)なのです」と。

翌日になって王は、その荒野におもむいて、自分の心の鏡に映った世界をもう一度みつけようと決意した。大臣たちと探し歩いたすえに、かれはついに心のなかで経験した荒野をみつければ細かいところまで心に描いたままであることに驚く。そこにはよく知っているアウトカースト(不可触民)の狩人たちがいたし、みずから不可触民として過した村がそのままの姿で存在していた。村人たちや生活用具や洪水で枯れてしまった樹々までがそのままだった。

たまたま義母となった老女にも出会ったので、きいてみた。「いったい何がおこったのですか。あなたは誰ですか」。するとかの女はつぎのように答えた。——あるとき王様がおいでにな

って、私の娘と結婚しました。子供たちも生まれたのですが、洪水がやってきて、すべての村人たちが死にました、と。

王は驚き、つぎつぎと聞きただしていくうちに、その老女の語ることがすべて、不可触民であったときの自分の経験したことであることに気づいた。

王は都の王宮に帰り、人びとの歓迎を受けた。

『ヨーガヴァーシシュタ』第三卷、第一〇四章

ラヴァナ王は魔術師の杖のひとふりによって、幻想の世界に入っていく。それはあるいは今日のわれわれが考えるような夢の世界とは違うものかもしれない。しかしながらそれでは昔の人びとが、幻覚・幻想のようなものと夢とをはっきり区別していたかというところとはかならずしもいえないであろう。夢か現かということがよくいわれるが、ちょうどそれと同じように、それは夢か幻覚かはつきりしないあいまいな意識の状態と考へてもさしつかえないのではないだろうか。

その夢（幻想）のなかで、ラヴァナ王は不可触民の娘と結婚し、家族をつくった。そしてその不可触民の貧しい生活をつづけていくうちに、王であったことをすっかり忘れてしまう。

そこへ飢饉と洪水がおとずれる。ついに下の息子に自分のからだを食べるようにいいのこして、死を決意して火葬の薪に登ろうとし

た。が、そのとき夢から覚める。

ところがどうしたわけか、王は自分がたんに夢や幻覚を見たのだとは思わない。それはこの世の中のどこかで実際に経験したことはないかと考え、探索の旅に出た。そしてついに、夢でみた不可触民の村を発見し、夢の中では義母であった老女と出会い、そこで体験したことがすべて現実であったことを知るのである。

みてきたように、この物語には二つの現実が語られているようにみえる。一つは、いうまでもなく主人公のラヴァナ王が王として生きてきている現実である。廷臣にかこまれ、肥沃な国土を支配している国王の生活である。それにたいしてもう一つの現実がある。夢の中で体験した不可触民に身をおとした生活である。なぜなら夢から覚めたあと、実際にその地に足を運んで、不可触民になっていた自分の生活のことをきかされているからである。

この物語には、われわれが慣れ親しんでいる、夢の世界と現実の世界というあの二元論の枠組みがはじめからとりはらわれているのではないだろうか。なぜなら夢の世界も現実、現実の世界ももう一つの現実、という多少ともねじれた物語の構造が設定されているようにみえるからである。

いったい、どちらが本当の現実なのであろうか。

現実のラヴァナ王は夢見心地になって幻想の世界に入っていくのであるから、そのかぎりでは不可触民に身をおとした生活は幻想、

幻覚の世界ということになる。ところが後段になって幻想から覚めたあと、その幻想の世界での出来事が実際にこの世に存在したという話になる。そこでは不可触民となつて生きたことが現実であつて、そのときかれが国王であつたということはむしろ現実ならざる枠組のなかに棚上げされているようにみえる。覚めているはずの王は、あたかも夢遊病者のようにさまよい歩いて、ついに不可触民の村という現実の岸辺に到着したのであるから――。

私はいま、この物語には二つの現実が描かれているといつたけれども、しかし考えてみればそれと同じような意味において、そこには二つの幻想世界（もしくは夢の世界）が語られているともいえそうである。国王の生活と不可触民の経験はともに二つの現実であるといっているようでもあり、同時にまたそれは二つの幻想（夢）であるといっているようにもみえるからである。そうなると、いったいどちらが本当の現実なのかといったような問いははじめから成り立たないことになるのではないだろうか。――物語の作者は、どうもそのように主張しているように私には思われるのである。

一つの夢物語を語りながら、その夢の世界がそのまま現実世界にすりかわったり、逆にまたわれわれの現実世界がそのまま夢物語に変貌してしまうといった具合に、話が展開していく。その一種ねじれたような関係が奇妙な違和感を読む者の側にひきおこす。そういう語り口は、フロイトなんかの考え方に慣れ親しんだ者の目にはや

はり異質なものに映るのではないかと思う。

この物語の作者は、明らかに、夢（幻想）の世界が非現実であるように、夢や幻想をみるわれわれの現実の世界もまた非現実の一樣相であると主張しているのである。そしてそのようなものの見方のなかに私は、インド人が考えた「空」の意味がかくされているのではないかと思うのである^⑩。

五

私は小論を、熟睡の問題からはじめた。あるいは覚醒と熟睡の二定点を浮き彫りにして、そこに光をあてようとしてきた。夢は、その覚醒から熟睡にいたるプロセスの、両義的な一里塚であつた。またわれわれが熟睡に落ちていくときは、それはかぎりなく死に近づいていくことでもあるだろう、ということもいった。

そこで、最後にふたたび、この熟睡のテーマに立ちもどることにしよう。舞台もインドから日本に移して、問題の若干の展開をはかつてみよう。ここでの主題は、さしあたり能と人形浄瑠璃である。

舞台の上の能役者のからだをみると、とても生きている人間の中からとは思えないような瞬間がある。ゆっくり動いて、静止したようなとき、それはいわば息を停めたからだ、かぎりなく死体に近いからだ、のようにみえる。

が、その能役者がわずかに身じろぎし、足をすり、機械人形の一

うに腕を上下させはじめると、死体がにわかに呼吸を開始する。

能の演出は、生きている人間のからだをかぎりなく死体に近づけようとするところに、危うく成立しているのであるらしい。だから、そのように死体へと無限接近を試みるからだは、けっしてたんなる物体なのではない。物体ではありえない。いわばそれは、魂をもつ死体であるからだ。亡霊を宿す死体であるからだ。その意味で、その死体のようなからだは熟睡の底に落ちているからだに似ているのである。能のある種のをわれわれは、「夢幻能」と呼ぶことがあるが、本当のことをいえば、夢幻のさらに底の方に漂っている能、というべきなのかもしれない。

これにたいして人形浄瑠璃で使われる人形は、それだけではもちろんただの木偶である。ところがその人形が衣裳を着せられ、人形遣いの太夫に操られだすと、にわかに生々しいからだに変貌していく。木偶という物体が生気をとれどし、魂入れの儀礼をほどこされたようにこの世に蘇る。泣いたりわめいたり、身をよじったり大立ち廻りを演じたりと、とてもさきの能役者の段ではない。

たんなる物体であった人形が、死の境界を飛びこえ、電気が通じたようにいきなりからだのしなやかさと柔らかさを獲得する。

能役者のからだは何とかなして死体への至近距離にいたりつこうとしているのにたいして、操り浄瑠璃の人形は生き生きしたからだへの絢爛豪華な異常接近をめざしている。からだというものにたいす

る演出の手法が、まるっきり逆なのだ。能はからだを死体（＝熟睡するからだ）に近づけ、操り浄瑠璃は死体からだの暖気を吹き込もうとしている。この二つの逆方向の演出は、からだに内蔵されている二重の感覚、からだに埋めこまれている独特の死体感覚を喚起しているのである。

とすればわれわれは、夜眠るとき、いわば能の舞台にすすみでるような体験をしていることになるのではないだろうか。なぜならそのときわれわれは、熟睡しているときのからだ、死体のようなからだにかぎりなく近づこうとしているからである。それにたいして深夜の熟睡から蘇るときは、義太夫の語りに操られる人形のような役割を演じているのかもしれない。

おそらくわれわれのからだのうちには、死に向かうベクトルと生へと蘇るベクトルが、あたかも交流電灯のように明滅しているのであろう。その二重の電流がわれわれのからだに柔軟なリズムを喚起し、多層的な死生観をもたらし原因になっているのかもしれない。

たとえば古代に、もぐり殯という習慣のあったことが知られている。殯というのは、死後その人間の遺体を一定の期間、地上に安置しておくことだ。からだの方はすでに息を停めている。死体になっている。けれどもそのからだは、ひょっとするとふたたび魂（息）が呼びもどされて生き返るかもしれない。

昔は、そのために魂呼びという儀式さえおこなわれた。しかし

やがてその可能性のないことが確認されて、遺体は埋葬される。火葬にされる場合ももちろんあった。正式の葬儀がおこなわれて、その死が社会的に認知されるのである。

つまり殯の状態になったからでは、生理的にはすでに死んでしまっているからであるが、社会的にはまだ生きているかのようになされている。そういう二重の状態におかれている。死へのベクトルと生へと蘇るベクトルが、そこに交錯し交叉している。能役者のからだと操り淨瑠璃の人形のからだ、それぞれの分身のように折り重なっている。熟睡する身体と覚醒する身体が、あたかも両性具有者のようにそこからだと意識を寄せ合っているのである。

夢の物語が、現実のような非現実のような色合いを帯びてわれわれの意識の中に立ちあらわれてくるのも、おそらく両性具有者のような二重の生死感覚がわれわれのからだにたたみこまれているからではないだろうか。

注

(1) メダルト・ボス・霜山徳爾・大野美津子訳『東洋の英知と西欧の心理療法―精神医学者のインド紀行』、みすず書房、一九七二年、とくに第六章「インドの英知を求めて」を参照。

(2) 同書、一二二―七頁。

(3) 同書、二〇五頁。

(4) ヤッフエ編、河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳『ユング自伝』2、みすず書房、一九七三年、一六九―七一頁。これはユングが、一九四四年の病いの後で見た夢である。

「その夢の中で、私はハイキングをしていた。丘陵の風景の中の小道を私は歩いてた。太陽は輝き、私は四方を広々と見渡すことができた。そのうち、道端に小さい礼拝堂のあるところに来た。戸が少し開いていたので、私は中にはいった。驚いたことに、祭壇には聖母の像も、十字架もなく、その代りに素晴らしい花が活けてあるだけであった。しかし、祭壇の前の床の上に、私の方に向かってひとりのヨガ行者が結跏趺坐し、深い黙想にふけっているのを見た。近づいてよく見ると、彼が私の顔をしていることに気がついた。私は深いおそれのために、として目覚め、考えた。「あー、彼が私について黙想している人間だ。彼は夢をみ、私は彼の夢なのだ。」彼が目覚めるとき、私は此の世に存在しなくなるのだと私には解っていた。」

この自分の夢について、ユングは右の文につづけて、つぎのようにいっている。

「かくて、ヨガ行者の像は、私の無意識の出生前の全体性を示すものであり、夢の場合によく生じることだが、心の中の「極東」すなわち私たち自身に対立し、疎遠な心の状態を示している。魔法の幻灯と同様に、ヨガ行者の黙想は私の経験的な現実

を「投影する」。一般に、われわれはこの因果関係を逆に見ている。……われわれの基礎は自我―意識にあり、われわれの世界、光の視野は自我の焦点に中心づけられている。……皮相的な観察者は、自我に中心をおいた仮説に満足している。……

この夢の目的は、自我―意識と無意識との関係の逆転をもたらし、無意識を現実の経験をしている人格の発生源として示すことにある。この逆転は、「あちら側」の意見によると、無意識的存在が本当のもので、われわれの意識の世界は一種の幻想であり、夢の中では夢が現実であるように、特殊な目的に従って作りあげられた見せかけの現実なのではないかと、示唆している。このような状態は、東洋人のマヤーの概念と非常に近似したものであることは明らかである」。

(11) 拙稿「〈死〉と〈生〉を歩き来するからだ」、『太陽』七月号、一九九六年、二六頁、を参照。

- (5) A. B. Keith: *A History of Sanskrit Literature*, Oxford University Press, 1920, pp. 479-80.
- (6) この引用する取意訳は Wendy Doniger O'Flaherty, *Dreams, Illusion and Other Realities*, University of Chicago Press, 1984. の二〇七―九頁によった。
- (7) 同書、二四〇頁。
- (8) 拙稿「夢見られた夢見る人」、『ブシケ―特集・物語』第十一号、一九九二年、七一―〇頁、を参照。
- (9) W. D. O'Flaherty の一三三―一三四頁によった。
- (10) 拙稿「夢と空」、『イマージュ』第二巻第十二号、一九九一年、二一―五頁、を参照。